

同一指示解釈と叙述関係

池田 則之

(九州大学大学院)

ikedanoriyuki@kyudai.jp

キーワード：分裂文、同一指示、彼

1. 問題提起

表現と指示の関係については、これまでさまざまな研究が行われてきた。どの研究においても、指示という現象を考える上で、大きな役割を担っているのは指標の捉え方である。たとえば、Tarski (1956:163)では、記号と自然数との順序対をメンバーとする系列 (sequence) という集合を仮定し、言語表現が自然数の指標を持っていると考える。例えば、(1)のような系列があるとし、(2)の文の「山田先生」には指標1が付いているとする。

(1) $\{ \langle 1, [[山田先生]] \rangle, \langle 2, [[ポチ]] \rangle, \langle 3, [[甲子園球場]] \rangle, \langle 4, [[ジョン]] \rangle \}^1$

(2) 昨日、山田先生₁に会ったよ。

名詞句が持っている指標と同じ指標を持っている順序対に含まれている個体が、その名詞句によって指示される個体である。(2)の「山田先生」は1を持ち、(1)の系列では、 $\langle 1, [[山田先生]] \rangle$ という順序対があるので、 $[[山田先生]]$ という個体が名詞句「山田先生」の指示対象物になる。この考え方にならえば、具体的に何かを指す表現は、指標を持っていることになる。本論文でも、指標とモノとが対応関係にあると想定している²。つまり、言語表現が指標を持っていれば、

¹ $[[\quad]]$ は現実世界に実際に存在する個体そのものを表す。

² 本論文での表現とモノとの対応関係は、Tarski (1956)では少し異なっているが、それについては後述する。

その言語表現は具体的な指示対象を持っているということである。その点では、Lasnik (1976), Chomsky (1981)などの free indexingという考え方とも、Reinhart (1983)のcoindexing ruleの考え方とも異なっている。むしろ、Heim (1998)の指標の位置づけに近い考え方である。

さて、Evans (1980) などでは、代名詞表現に2種類あるということが言われてきた。1つは、Lasnik (1976)などで言及されている、独立に指示対象を持っている代名詞である。たとえば、(3a)の he は、具体的な人物を直接指示する表現である。一方、(3b)の his は、特定の人物を指示するわけではなく、いわゆる束縛変項に相当する表現である (Partee 1978)。

- (3) a. He's up early. (Evans 1980, (1))
b. Everyone loves his mother. (Evans 1980, (4))

(3a)の he は特定のモノを指示対象として持っている表現なので、ここでは、指標を持っていると仮定する。一方、(3b)が束縛変項解釈をされる場合には、his は、(3a)が持っているような指標は持っていないはずである。(3b)で束縛変項解釈が生まれるために、どういう機構が必要かは重要な課題であるが、本論文では、それをひとまず置き、まず、(3a)のタイプの指標の有無ということに集中する。

さて、黒田 (1979), Takubo & Kinsui (1996), Hoji et al. (1999) などで、「あいつ」は、必ず指示対象が定まっていなければならない表現であり、そのため、「あいつ」には束縛変項に相当する用法もないと考えられてきた。一見、「彼」も「あいつ」と同じ特性を持っているように見える。

- (4) a. ^{ok}あいつが同僚を非難した。
b. ^{ok}彼が同僚を非難した。

同一指示解釈においても、同じ特性を持っているように見える。以下の例では、下線の表現が同じ対象を指す解釈だけを問題にすることにし、付けられている容認性の印も、その同一指示解釈についての容認性を示している。

- (5) a. *すべての若手社員があいつの同僚を非難した。
b. *すべての若手社員が彼の同僚を非難した。

ところが、「彼」の場合には、必ずしも指示対象が明らかでない場合にも使用

可能である。

- (6) a. *若手社員が誰か あいつの同僚を 非難した。
b. ^{ok}若手社員が誰か 彼の同僚を 非難した。

したがって、「彼」には、(3a)で示した指標を、持っていない用法もあるということになる。さらに、(7)-(11)で示す通り、「彼」は「あいつ」よりも使用範囲が広い。

- (7) a. *あいつの同僚が部長を非難した。
b. ^{ok}彼の同僚が部長を非難した。

- (8) a. *あいつを課長の上司が叱った。
b. ^{ok}彼を課長の上司が叱った。

- (9) a. *あいつの同僚に若手社員を課長がけしかけた。
b. ^{ok}彼の同僚に若手社員を課長がけしかけた。

- (10) a. *あいつの部下に謝罪した部長が若手社員を解雇した。
b. ^{ok}彼の部下に謝罪した部長が若手社員を解雇した。

- (11) a. *あいつの同僚が若手社員にけしかけたのは、課長をだ。
b. ^{ok}彼の同僚が若手社員にけしかけたのは、課長をだ。

(7)-(11)での「彼」も(3a)のタイプの指標を持たない用法によって同一指示解釈が可能になっていると考えてもよい。以下では、便宜的に、この用法を "無指標の「彼」" と呼ぶことにする。この論文では、無指標の「彼」がどのような条件下で容認可能であると解釈されているのか、その一端を明らかにしたい³。

2. 提案

2.1. SR

まず、ここで前提としている構造と意味解釈の関係についてモデルを提示し

³ 無指標の「彼」が、なぜ束縛変項の用法を持たないのか、という問題については、今後の課題とし、本論文では解決の方向を示唆するにとどめる。

ておく。

これまでの生成文法理論研究では、LF は構成的な意味関係を表すレベルであるとされ、語用論に関わる意味関係を表すレベルではないということは仮定されていたものの、LF と語用論がどのように関わるかということについては、明示的な分析が少なかった（齊藤 2006 など）。

これに対して、上山(2008)は、LF 表示から機械的に変換される S(emantic)R(epresentation) という表示体系を用いて、そのSRが人間の意味理解にどのように影響を与えるかのモデル化を試みている。上山(2008)が仮定している、文生成／文理解に共通する操作の流れは次の通りである⁴。



SR は言語の自律的計算システムの最終的な出力であり、これは、LF 表示との対応が明示的であるとともに、言語使用者の知識データベースとの対応づけもしやすい形式で表記されることが目指されている。

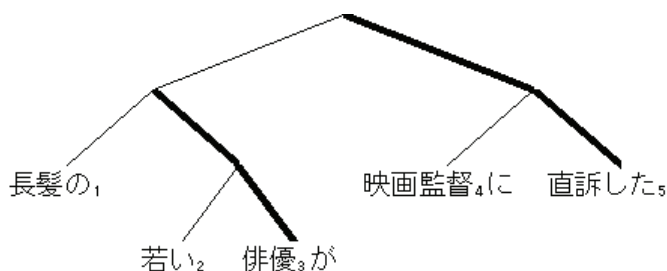
たとえば、(13a)の文が(13b)のLF構造を持っているとする⁵。

(13) a. 長髪₁の若い俳優₂が映画監督₄に直訴した₅。

⁴本論文で採用している枠組みは上山(2008)と同じものであるが、各語彙 1 つ 1 つで情報を分割して表すという表示方法は上山(2005)が初出である。

⁵ 以下、本論文で示す樹形図では、Mergeの際、投射 (project) する側 (つまり、主要部) の枝を太線で表示する。

b.



また、(13a)の各語彙項目に付けられている指標は、上で言及した指示指標 (referential index) である。従来、このような指標は、モノ (individual) についてしか仮定されてこなかったが、本論文で仮定している枠組では、コト (eventuality) も指示対象物 (referential object) とみなしうると考え、原則的にすべての語彙項目が1つずつ指標を持つと仮定している。その語彙項目がモノに関する情報を導入するか、コトに関する情報を導入するかは、それぞれ辞書 (Lexicon) において指定されている。たとえば、この文の場合には次のようになる。

- (14) a. モノに関する SR 式に変換される語彙：俳優、映画監督
b. コトに関する SR 式に変換される語彙：長髪、若い、直訴した

- (15) a. モノに関するSR式型 x_n : (そのモノに関わる記述)
b. コトに関するSR式型 e_n : (そのコトに関わる記述)

たとえば、次のようなSR式が派生する⁶。

- (16) a. e_1 : 長髪
b. e_2 : 若い
c. x_4 : 映画監督

さらに、 x_3 に関しては、主要部となっている要素（「俳優」）に加えて、それを修飾する要素（「長髪」、「若い」）があるため、次のように情報が加えられる。

⁶ (16)で挙げられている3つの式型1つ1つをSR式と呼び、これらSR式の集合全体をSRと呼ぶ。

(17) x_3 : 俳優 & e_2 & e_1

また、 e_5 は、動詞（「直訴した」）で、項構造を持っているため、(17)のように単に関連物が列挙される形式ではなく、それぞれの θ 役割を満たす形で情報が加えられている。

(18) e_5 : 直訴した & Theme(x_4) & Agent(x_3)

まとめると、(13)に対応するSRは、次のようなSR式の集合となる。

(19) e_1 : 長髪
 e_2 : 若い
 x_3 : 俳優 & e_2 & e_1
 x_4 : 映画監督
 e_5 : 直訴した & Theme(x_4) & Agent(x_3)

1つ1つのSR式は、モノやコトの情報を表しており、それぞれ指示対象物と関連づけられることで理解に結びつく。

2.2. 無指標の「彼」の解釈

上で、(7)のような例文を示して、「彼」には無指標の用法があるのではないかということを示唆した。

- (7) a. *あいつの同僚が部長を非難した。
b. ^{ok}彼の同僚が部長を非難した。

2.1節で紹介したSRの書き方では、各語彙項目に指標がついていることが前提となっていたので、無指標の語彙項目があると、次のようにSR式の中に空欄が生じてしまう。Genというのは、この場合のノ格名詞句が持っている θ 役割を表すとす。

(20) x_1 : 同僚 & Gen()
 x_2 : 部長
 e_3 : 非難した & Theme(x_2) & Agent(x_1)

このような空欄をどのように解釈するかということについては、別の方法を考案しなければならない。

ここで注目したいのは、(7b)で「彼」＝「部長」という解釈は、必ずしも最初に思いつく解釈ではなく、この文全体が「部長」について述べたものだと思って読んで初めて可能になる解釈だという事実である。このように、AについてBと述べる、というのは、我々の基本的な認知活動の1つである。つまり、無指標の「彼」の解釈には、この「AについてBと述べる」という関係が必要であり、その関係のもとで、無指標の「彼」がAであると解釈されるのである。ここでは、上山(2010)にしたがって、この関係を叙述関係と呼ぶ。

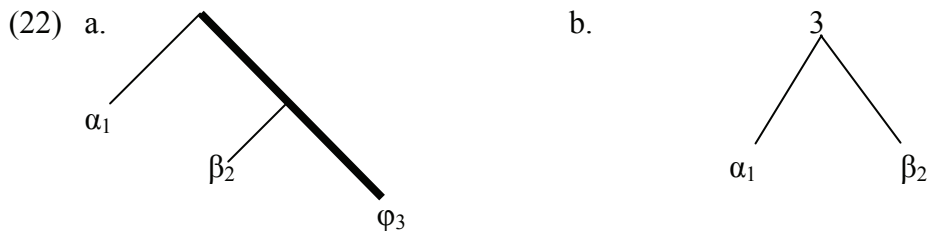
2.3. 叙述関係

叙述関係は、次のようなSR式で表現されると考える。

$$(21) \quad e_3 : \text{Subject}(x_1) \ \& \ \text{Predicate}(e_2)$$

これが「 x_1 について e_2 と述べる」という関係である。

(18)になぞらえて考えると、それ自身では意味内容を持たず、(Subject, Predicate)という項構造を持った機能範疇があれば、このようなSR式が派生する。樹形図で表すと、(22a)のようになる。



(22a)では、 α がSubjectに β がPredicateに相当する。(22a)で機能範疇 ϕ を仮定しているのは、1つには、 α も β も主要部ではないからであり、もう1つには、叙述関係を表す e の指標をLF構造の中に持ち込むためである。ただ、この機能範疇は、それ以外の役割を果たしていないので、以下では、便宜的に、SubjectとPredicateをsisterとし、指標を上部に表記した(22b)を略記として用いる。

このように叙述関係というものを定義した上で、(23)のように考えたい。

$$(23) \quad \text{無指標の「彼」が存在していることでSR式に生じるPredicate内の空欄は、そのPredicateのSubjectによって解釈される。}$$

具体例として、(24)の文における「彼」と先行詞の同一指示解釈を見てみよう。
(24b)は(24a)から変換されたSRである。

- (24) a. 課長₁が彼の部下₂を非難した₃
b. x_1 : 課長
 x_2 : 部下 & Gen()
 e_3 : 非難した & Theme(x_2) & Agent(x_1)

(24b)に加えて、(25)の叙述関係が成立しているとする。

- (25) e_4 : Subject(x_1) & Predicate(e_3)

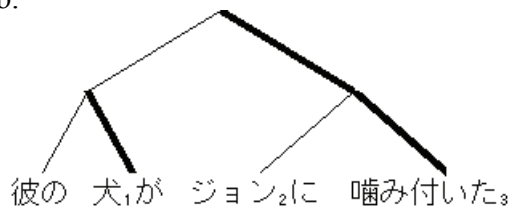
すると、(23)により、 x_2 のSR式にある空欄はSubjectである x_1 で代替される。その結果、この文のSRは(26)のようになり、「彼」と「課長」の同一指示解釈が成立することになる。

- (26) x_1 : 課長
 x_2 : 部下 & Gen(x_1)
 e_3 : 非難した & Theme(x_2) & Agent(x_1)
 e_4 : Subject(x_1) & Predicate(e_3)

2.4. Subject化

ここで問題となるのは、(27)のように、「彼」の先行詞となるものがそのまま Subject にはなれない位置に現れている場合である。

- (27) a. 彼の犬₁がジョン₂に噛み付いた₃
b.



- c. x_1 : 犬 & Gen()
 x_2 : ジョン

e_3 : 噛み付いた & Theme(x_2) & Agent(x_1)

ここで、必要なのは、(28)の叙述関係である。

(28) e_4 : Subject(x_2) & Predicate(e_3)

(28)さえあれば、(29)のように解釈を完了させることができる。

(29) x_1 : 犬 & Gen(x_2)
 x_2 : ジョン
 e_3 : 噛み付いた & Theme(x_2) & Agent(x_1)
 e_4 : Subject(x_2) & Predicate(e_3)

また、(30)のように、「彼」の先行詞が名詞句に含まれている場合でも、同様の操作が必要である。

(30) a. ジョン₁の犬₂が彼に噛み付いた₃
b. x_1 : ジョン
 x_2 : 犬 & Gen(x_1)
 e_3 : 噛み付いた & Theme() & Agent(x_2)

この場合も、(31)があれば、(32)のように解釈が可能になる。

(31) e_4 : Subject(x_1) & Predicate(e_3)

(32) x_1 : ジョン
 x_2 : 犬 & Gen(x_1)
 e_3 : 噛み付いた & Theme(x_1) & Agent(x_2)
 e_4 : Subject(x_1) & Predicate(e_3)

ここで必要とされているのは、文中のある要素を Subject とし、残りの部分を Predicate とする新たな叙述関係を加える操作である。このように、LF 表示には含まれていない叙述関係を新たに SR に加える操作を Subject 化と呼び、(33)のように定義する。ここで、新たな Subject として選択するものは、Predicate となる部分に含まれている必要があるので、(34)のように include という関係概念を

定義する。

(33) Subject 化 :

任意のSR α において、 x_n をincludeする任意の e_m をとって、次のSR式を α に加える。(ただし、 p は新しい指標番号とする。)

e_p : Subject (x_n) & Predicate (e_m)

(34) include :

1) α が持つ指標を a 、 β が持つ指標を b とした場合、 O_b : ... O_a ...ならば、 β が α をincludeする。⁷

そして、

2) γ が α をincludeし、 β が γ をincludeするならば、 β も α をincludeする。

(34)のincludeの定義に基づくと、Subject化の操作には局所性がないことになり、これは、無指標の「彼」の先行詞がいわゆる「島」の中に含まれていてもかまわないことを予測する。実際、(35)の例で「彼」と「若手社員」の同一指示解釈が可能である。

(35) ^{ok}彼の上司₁が[[若手社員₂を非難した₃]新入社員]₄を解雇した₅

(35)のSRは(36)であり、Subject化によって加えられるSR式が(37)である。

(36) x_1 : 上司 & Gen()

x_2 : 若手社員

e_3 : 非難した & Theme(x_2) & Agent(x_4)

x_4 : 新入社員 & e_3

e_5 : 解雇した & Theme(x_4) & Agent(x_1)

(37) e_6 : Subject(x_2) & Predicate(e_5)

その結果、(23)より、(38)が派生し、結果的に「彼」と「若手社員」の同一指示

⁷ "O" (Object) は x と e の上位概念であり、(34)は、 x を含むSR式にも e を含むSR式にも適用する。

解釈が表される。

- (38) x_1 : 上司 & Gen(x_2)
 x_2 : 若手社員
 e_3 : 非難した & Theme(x_2) & Agent(x_4)
 x_4 : 新入社員 & e_3
 e_5 : 解雇した & Theme(x_4) & Agent(x_1)
 e_6 : Subject(x_2) & Predicate(e_5)

このように Subject 化という操作に島の制約が関わらないという事実は、Subject 化という操作が統語操作でないことを強く示唆している。すなわち、Subject 化とは、SR が派生したあとに行われる操作である。そのため、(33)でも、SR に言及した定義を用いている。

2.5. Predicative Island 制約

Subject 化という操作は、叙述関係に対して適用するものであるからこそ、他の叙述関係の存在が障害になりうる。たとえば、次の対立を見てほしい。

- (39) a. ^{ok}彼の旧友₁が若手社員₂の上司₃にあいさつした₄
b. x_1 : 同僚 & Gen()
 x_2 : 若手社員
 x_3 : 上司 & Gen(x_2)
 e_4 : あいさつした & Goal(x_3) & Agent(x_1)
c. e_5 : Subject(x_2) & Predicate(e_4)
d. x_1 : 同僚 & Gen(x_2)
- (40) a. *[彼の旧友₁は、若手社員₂の上司₃にあいさつした₄]₅
b. x_1 : 同僚 & Gen()
 x_2 : 若手社員
 x_3 : 上司 & Gen(x_2)
 e_4 : あいさつした & Goal(x_3) & Agent(x_1)
 e_5 : Subject(x_1) & Predicate(e_4)

ハ句は、その性質上、Subject となる表現であり、(40)は、「彼の旧友」を Subject とする叙述関係をすでに含んでいる。この場合、(41)のような Subject 化を阻止

できれば、(39)と(40)の対立が説明できる。

(41) $e_6 : \text{Subject}(x_2) \ \& \ \text{Predicate}(e_5)$

そこで、次のような制約を提案する。

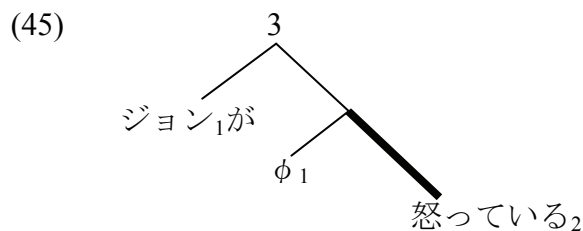
(42) **Predicative Island 制約**

ある叙述関係 β の **Predicate** 内の要素 α を、 β を **include** する **Predicate** の **Subject** にすることはできない。

(40b)のSRは、すでに e_5 という叙述関係を含んでおり、 x_2 は、 e_5 の**Predicate**である e_4 内の要素である。(41)は、その x_2 を**Subject**とし、 e_5 の**Predicate**とする叙述関係なので、まさに、(42)によって形成が阻止される叙述関係になっている。(40a)で「彼」と「若手社員」の同一指示解釈ができないのは、このためである。

話者によっては、(40)だけでなく(39)の同一指示解釈も容認できないという人がいるかもしれない。これは、ハ句を含まない文であっても、ガ句が **Subject** となる LF 構造が生成される可能性があるからである。(43)の文に対して、(44)は叙述関係を含まない場合の構造であり、(45)は叙述関係を含む場合の構造である。

(43) ジョンが怒っている。



無指標の「彼」の同一指示解釈の容認性判断が必ずしも安定しないことがあるのは、この構造的な多義性のゆえである。

3. 帰結：分裂文における同一指示解釈

もし、無指標の「彼」の解釈に Subject 化という操作が関わっており、Subject 化が Predicative Island 制約によって制限されるとすると、その効果は、叙述関係が LF 構造ですでに含まれている構文において、はっきりと確認できるはずである。この節では、そのような構文の一例として分裂文における同一指示解釈を観察する。

ここで分裂文と呼んでいるのは、(45)のような形式をした構文であり、 α (前提節) と β (焦点句) の間に叙述関係が成り立っている。

(46) $[\alpha \quad \quad \quad]$ のは、 $[\beta \quad \quad]$ だ

Kizu (2005)や川添 (2005)に従い、分裂文では、焦点句に相当する operator が基底生成位置から、文頭に移動していると考えておく。そうすると、焦点句の NP の格と、前提節の中の基底生成位置の格とを一致させることができるため、焦点句は格助詞が現れる場合にも対応できる。

以下の各節で、次の4つのパターンの同一指示解釈を取り上げ、ここでの分析から予測されるとおり、(47d)においてのみ、同一指示解釈が阻止されることを示す。

- (47) a. $[\alpha \quad \dots \text{先行詞} \quad \dots]$ のは、 $[\beta \quad \dots \text{彼} \quad \dots]$ だ
- b. $[\alpha \quad \dots \text{先行詞} \quad \dots \text{彼} \quad \dots]$ のは、 $[\beta \quad \quad \quad]$ だ
- c. $[\alpha \quad \dots \text{彼} \quad \dots \text{先行詞} \quad \dots]$ のは、 $[\beta \quad \quad \quad]$ だ
- d. $*[\alpha \quad \dots \text{彼} \quad \dots]$ のは、 $[\beta \quad \dots \text{先行詞} \quad \dots]$ だ

3.1. (47a)の場合

(48)は、(47a)のパターンの例である。

- (48) a. ${}^{\text{ok}}[\alpha \text{課長が面倒な新入社員を押し付けた}]$ のは、 $[\beta \text{彼の部下に}]$ だ。
- b. ${}^{\text{ok}}[\alpha \text{課長の上司が面倒な新入社員を押し付けた}]$ のは、 $[\beta \text{彼に}]$ だ。
- c. ${}^{\text{ok}}[\alpha \text{課長の上司が面倒な新入社員を押し付けた}]$ のは、 $[\beta \text{彼の部下に}]$ だ。

予測通り、この文では、「彼」と「課長」の同一指示解釈が可能である。

たとえば(48a)の SR は、(49)のとおりである。

- (49) x_1 : 課長
 e_2 : 面倒な
 x_3 : 新入社員 & e_2
 e_4 : 押し付けた & Goal(x_3) & Theme(x_5) & Agent(x_1)
 x_5 : 部下 & Gen()
 e_6 : Subject(e_4) & Predicate(x_5)

(49)に対して、(50)のような叙述関係を加えることは、Predicative Island 制約に違反しない。

- (50) e_7 : Subject(x_1) & Predicate(e_6)

なぜならば、 e_7 でSubjectとして選ばれている x_1 は、 e_6 のPredicateである x_5 に含まれていないからである。(48b,c)の説明も同様である。

3.2. (47b)の場合

次に、(51)は、(47b)のパターンの例である。

- (51) a. ^{ok}[α 課長が彼の部下に押し付けた]のは、[β 面倒な新入社員を]だ。
 b. ^{ok}[α 課長の上司が彼に押し付けた]のは、[β 面倒な新入社員を]だ。
 c. ^{ok}[α 課長の上司が彼の部下に押し付けた]のは、[β 面倒な新入社員を]だ。

この場合も予測通り、「彼」と「課長」の同一指示解釈は可能である。説明も同様のため、省略する。

3.3. (47c)の場合

今度は、「彼」が先行詞よりも先に出てきている(47c)の場合である。

- (52) a. ^{ok}[α 彼の上司が課長に押し付けた]のは、[β 面倒な新入社員を]だ。
 b. ^{ok}[α 彼の上司が課長の部下に押し付けた]のは、[β 面倒な新入社員を]だ。

(52)に示すように、先行詞が α に含まれている限り、同一指示解釈は可能である。

(52a)のSRは、(53)のとおりで、Subject化によって新たに加えられるSR式は(54)である。

- (53) x_1 : 上司 & Gen()
 x_2 : 課長
 e_3 : 押し付けた & Goal(x_2) & Theme(x_5) & Agent(x_1)
 e_4 : 面倒な
 x_5 : 新入社員 & e_4
 e_6 : Subject(e_3) & Predicate(x_5)

- (54) e_7 : Subject(x_2) & Predicate(e_6)

先の場合と同様、 e_7 の形成は、Predicative Island制約に抵触しない。

3.4. (47d)の場合

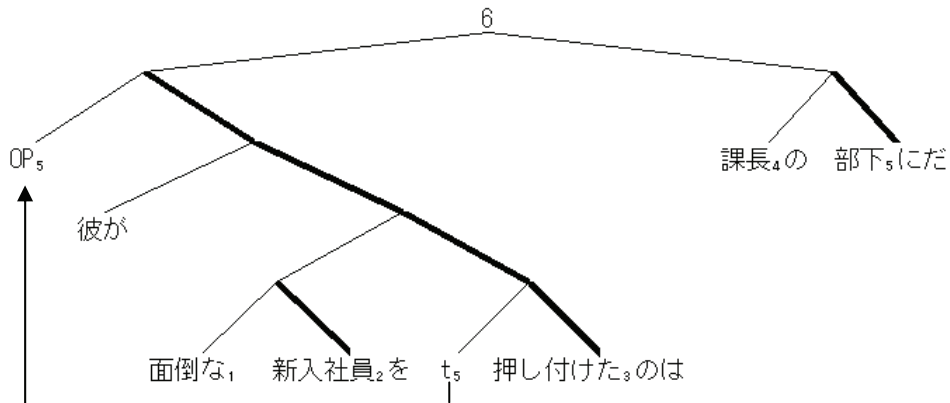
最後に、(47d)のパターンの文を見る。

- (55) a. * $[\alpha$ 彼が面倒な新入社員を押し付けた]のは、 $[\beta$ 課長の部下に]だ。
b. * $[\alpha$ 彼の上司が面倒な新入社員を押し付けた]のは、 $[\beta$ 課長に]だ。
c. * $[\alpha$ 彼の上司が面倒な新入社員を押し付けた]のは、 $[\beta$ 課長の部下に]だ。

予測通り、このパターンの文の場合、「彼」と「課長」の同一指示解釈は容認不可能である。以下で、本論文の提案によって、このことがどのように説明されるか示しておく。

(56a)は(55a)の構造を表したもので、(56b)はそのSRである。

(56) a.



- b. e_1 : 面倒な
 x_2 : 新入社員 & e_1
 e_3 : 押し付けた & Goal(x_5) & Theme(x_2) & Agent()
 x_4 : 課長
 x_5 : 部下 & Gen(x_4)
 e_6 : Subject(e_3) & Predicate(x_5)

ここで「彼」と「課長」が同一指示になるためには、(57)の叙述関係が必要である。

(57) e_7 : Subject(x_4) & Predicate(e_6)

ところが、これは(42)の制約に違反している。

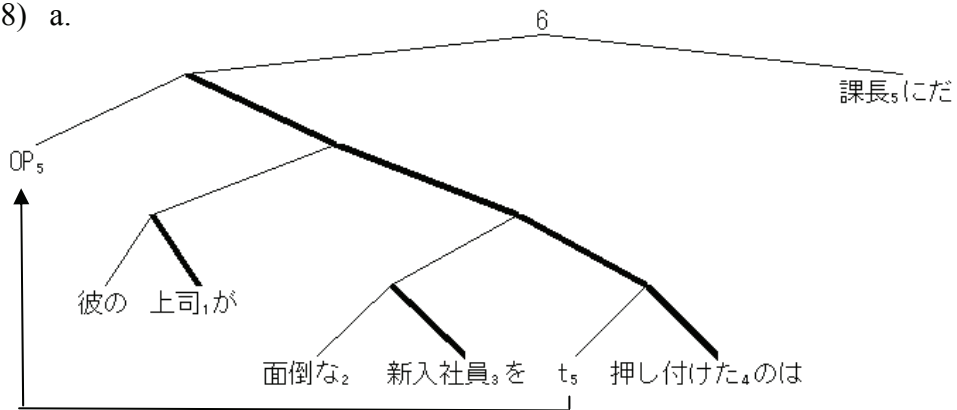
(42) Predicative Island 制約

ある叙述関係 β の Predicate 内の要素 α を、 β を含む Predicate の Subject になることはできない。

(57)がなければ、「彼」と「課長」の同一指示解釈は得られない。

(55b)も同様である。この文は(58a)の LF 構造を持っており、この LF 構造から(58b)の SR に変換される。

(58) a.



b. x_1 : 上司 & Gen()

e_2 : 面倒な

x_3 : 新入社員 & e_2

e_4 : 押し付けた & Goal(x_5) & Theme(x_3) & Agent(x_1)

x_5 : 課長

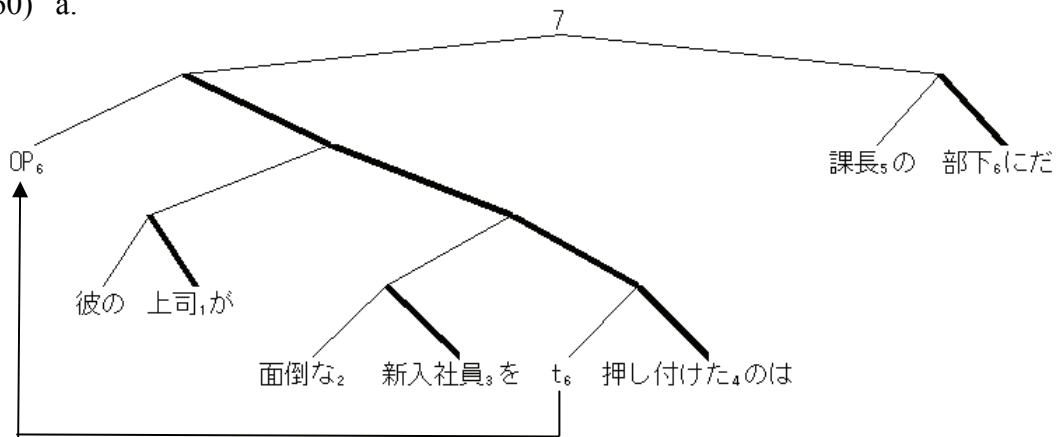
e_6 : Subject(e_4) & Predicate(x_5)

問題となる同一指示解釈に必要なのは、次の叙述関係であるが、この場合も、Predicative Island 制約により、阻止される。

(59) e_7 : Subject(x_5) & Predicate(e_6)

(55c)の例についても図示しておく。(55c)は(60a)の LF 構造を持ち、(60b)の SR に変換される。

(60) a.



- b. x_1 : 上司 & Gen()
 e_2 : 面倒な
 x_3 : 新入社員 & e_2
 e_4 : 押し付けた & Goal(x_5) & Theme(x_3) & Agent(x_1)
 x_5 : 課長
 x_6 : 部下 & Gen(x_5)
 e_7 : Subject(e_4) & Predicate(x_6)

この場合も、必要となる叙述関係(61)は、Predicative Island 制約により、形成されない。

(61) e_8 : Subject(x_5) & Predicate(e_7)

また(62)に示される通り、「彼」がガ格以外の場合でも、まったく同様である。

- (62) a. * $[_\alpha$ 課長が彼をけしかけた]のは、 $[_\beta$ 若手社員の先輩に]だ。
b. * $[_\alpha$ 課長が彼の上司をけしかけた]のは、 $[_\beta$ 若手社員に]だ。
c. * $[_\alpha$ 課長が彼の上司をけしかけた]のは、 $[_\beta$ 若手社員の先輩に]だ。
- (63) a. *課長が彼にけしかけたのは、若手社員の先輩をだ。
b. *課長が彼の上司にけしかけたのは、若手社員をだ。
c. *課長が彼の上司にけしかけたのは、若手社員の先輩をだ。

3.5. まとめ

このように、本論文で提案した分析により、分裂文における同一指示解釈のパターンは、すべて説明できる。

この提案にしたがうと、無指標の「彼」がうまく解釈できない場合は、必ず Subject 化を阻止するような、別の叙述関係が存在するはずだということになる。たとえば、次の例では、「彼」と「課長」の同一指示解釈の容認性はきわめて低い。

(64) *彼が課長の部下に押し付けたのは、面倒な新入社員をだ。

この事実そのものは、(43)-(45)で示したように、ガ格が Subject になる可能性があることから、特に驚くべきことではない。ただし、本来、(44)と(45)の構造的な多義性の可能性があるのならば、(64)においても LF 構造で叙述関係を形成しておかない選択肢もあるはずで、それならば、(64)が同一指示解釈を許してもいいはずである。この場合、何らかの理由で、叙述関係の形成が好まれると考えざるをえない。もちろん、上の(52)のように、叙述関係の形成が比較的容易に抑えられる場合も多い。この問題については、(64)の場合の「彼」が本当に無指標なのか、という可能性も考慮しながら、考えていきたい。

4. おわりに

以上、本論文では次のような分析を提案した。

(23) 無指標の「彼」が存在していることで SR 式に生じる Predicate 内の空欄には、その Predicate の Subject によって解釈される。

(33) Subject 化 :

任意の SR α において、 x_n を include する任意の e_m をとって、次の SR 式を α に加える。(ただし、 p は新しい指標番号とする。)

e_p : Subject (x_n) & Predicate (e_m)

(34) include :

1) α が持つ指標を a 、 β が持つ指標を b とした場合、 $O_b : \dots O_a \dots$ ならば、 β が α を include する。

そして、

2) γ が α を include し、 β が γ を include するならば、 β も α を include

する。

(42) Predicative Island 制約

ある叙述関係 β の Predicate 内の要素 α を、 β を include する Predicate の Subject にすることはできない。

この分析の前提となっているのは、2.1 節で紹介した指標と SR の位置づけ、および、無指標の「彼」があるという仮説である。「彼」の用法については、さらなる追究が必要であるが、その解釈に叙述関係というものが深く関わっていることを示した。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、九州大学言語学研究室の上山あゆみ先生をはじめ、稲田俊明先生、坂本勉先生、久保智之先生から丁寧な指導および様々な指摘をしていただきました。心からお礼を申し上げます。また、2 名の匿名査読者からは、重要なコメントをいくつもいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。無論、本稿における一切の誤りの責任は筆者にあります。

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Evans, Gareth (1980) "Pronouns." *Linguistic Inquiry* 11: pp.337-362.
- Heim, Irene (1998) "Anaphora and Semantic Interpretation: A Reinterpretation of Reinhart's Approach." *The Interpretive Tract MIT Working Papers in Linguistics* 25, pp.205-246.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, and Ayumi Ueyama (1999) "Demonstratives, Bound Variables, and Reconstruction Effects in Japanese." In *Proceedings of the Nanzan GLOW: The Second Meeting in Asia, September 19-22, 1999*, pp.141-158.
- 川添愛 (2005) 『動詞・項名詞句の意味合成と文構造』博士論文, 九州大学.
- Kizu, Mika (2005) *Cleft Construction in Japanese Syntax*. Houndmills: Palgrave Macmillan.
- 黒田成幸 (1979) 「『(コ) ソ、ア』について」『英語と日本語と』, くろしお出版. 東京. pp.41-59.
- Lasnik, Howard (1976) "Remarks on Coreference." *Linguistic Analysis* 2:

pp.1-22.

Partee, Barbara (1978) "Bound Variables and Other Anaphors." In: D. Waltz (ed.), *Proceedings of TINLAP 2*: pp.79-85. Urbana: University of Illinois.

Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and semantic interpretation* Croom-Helm; Chicago University press.

齊藤学 (2006) 『自然言語の証拠推量表現と知識管理』博士論文, 九州大学.

Takubo, Yukinori, and Satoshi Kinsui (1996) "Discourse Management in terms of Multiple Mental Spaces," *Journal of Pragmatics* 28, pp.741-758.

Tarski, Alfred (1956) "The concept of truth in formalized language," In: Alfred Tarski (ed.), *Logic, semantics, metamathematics*: pp.152-278. Oxford: Oxford University Press.

上山あゆみ (2005) 「経験科学としての生成文法—文法性と容認可能性—」『九州大学言語学論集』, 第 25・26 合併号, pp.189-213.

上山あゆみ (2008) 「文理解システム構築を目指して」『文理解システムの実用化を目指した基礎的研究』平成 19 年度 九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト (P & P) E タイプ No.19401 研究成果報告書, pp.14-74.

上山あゆみ (2010) 「predication の構造と解釈」未発表原稿, 九州大学.

Coreference and Predicational Relations

Noriyuki Ikeda

(Graduate School of Humanities, Kyushu University)

As has been claimed in Partee (1978), Evans (1980), among others, pronouns are divided into two types: one is referential, and the other is nonreferential, whose representative use is that of a bound variable. Unlike personal pronouns in English, *kare* in Japanese does not allow the bound variable use. This is why it has been argued in the literature that *kare* is unambiguously referential. This paper, however, proposes that at least some instances of *kare* do not have referentiality at all, and that they are in effect bound by the Subject of a predicational relation formed at a level after LF.

(初稿受理日 2011年2月28日 最終稿受理日 2011年7月2日)